

◆医師の異動（4月）

■着任（H30.4.1付）

外科部長	池野 嘉信（いけの よしのぶ）
産婦人科部長	脇ノ上 史朗（わきのうえ しろう）
呼吸器外科医長	奥野 翔子（おくの しょうこ）
整形外科医長	辻本 和之（つじもと かずゆき）
産婦人科副医長	渡辺 智之（わたなべ ともゆき）
泌尿器科医員	吹上 優介（ふきあげ ゆうすけ）
整形外科レジデント	領木 勇人（りょうき はやと）
外科（嘱託医）	西川 忠男（にしかわ ただお）
臨床研修医	西田 知弘（にしだ あきひろ）
臨床研修医	田中 葵（たなか あおい）
臨床研修医	森永 晃史（もりなが あきふみ）
臨床研修医	梶野 真由果（かじの まゆか）
臨床研修医	北野 英（きたの えい）
臨床研修医	藤原 直樹（ふじわら なおき）

■退職（H30.3.31付）

副院長	村中 幸二
小児科責任部長	橋本 和幸
腎臓代謝内科部長	田中 裕紀
呼吸器外科部長	小松 輝也
産婦人科部長	高橋 顕雅
整形外科医長	石江 慎一郎
産婦人科副医長	北澤 純
腎臓代謝内科レジデント	平井 太郎
臨床研修医	堀井 翔平
臨床研修医	田代 裕介



◆4階西病棟の休床について

当院では、施設の長寿命化、業務改善、経営効率の向上を図ることを目的に全病棟の改修工事を予定しております。それに伴い、4月から4階西病棟を休床することといたしました。

◆お知らせ

平成30年4月2日から新システム「びわ湖あさがおネット」の運用が始まります。新システムの移行に伴い、開始当初はスムーズな連携が難しいことが予想されます。ご迷惑をおかけいたしますがよろしく願いたします。



◆地域医療支援病院の名称承認について

当院は、平成30年3月27日付けで「地域医療支援病院」として称することを承認されました。今後も地域完結型医療を推進するため、地域の先生方との積極的な連携や地域の医療従事者を対象にした研修会の実施など、更なる地域医療の支援に尽力してまいります。

◀◀◀ 編集後記 ▶▶▶

ニュース情報からは桜の満開情報が聞こえてきますが、北部に位置する我が家の窓からは、梅の花が見頃となっています。散歩道を通り過ぎるチャリダーから「こちらは梅園が満開を迎えています」とのコメントが聞こえてきました。日本語の使い方によってこんなに印象深く残り、ホットする瞬間があることを体感しました。



Pink-Bu



ハル



大和

救急告示病院
日本医療機能評価機構認定病院
地域がん診療連携拠点病院
厚生労働省臨床研修指定病院
周産期協力病院
地域医療支援病院

市立長浜病院 地域医療連携だより

理念
地域住民の健康を守るため、「人中心の医療」
を発展させ、地域完結型の医療を進めます。

平成30年4月1日号 No.160

市立長浜病院ホームページ

<http://www.nagahama-hp.jp/>

市立長浜病院 検索



市立長浜病院患者総合支援センター 地域医療連携室

〒526-8580 長浜市大成亥町 313 番地

TEL:0749-65-2720 FAX:0749-65-2730

謹啓 時下益々ご清栄のこととお喜び申しあげます。平素は当院病院事業に格別のご高配を賜り、厚く御礼申しあげます。4月の外来診察担当医師表を別添資料でお届けいたしますので、ご査収ください。敬白

◆ICT(感染制御チーム)の取り組みについて

総合診療科部長（ICD：感染制御医師） 大野 暢宏



“ICT”と入れてネット検索すると情報分野でのICT(Information & Communication Technology)がまずヒットします。感染という単語を加えて再検索するとICT(インフェクションコントロールチーム、Infection Control Team)がヒットします。日本語では感染制御チーム、院内感染対策チームなどと呼ばれています。今回はこのICTのご紹介です。病院には様々な感染症の患者さんが入院されています。抵抗力の低い患者さんも多く入院されています。このような環境の中で、患者さん同士また患者さんと職員との間で新たな感染が起きないように予防し、また感染が発生してもできるだけ早く発見し、それ以上上げないよう活動している集団がICTです。ICD(感染制御医師)、ICN(感染管理認定看護師)、臨床検査技師、感染制御認定薬剤師、事務職員からなり、連携しながら具体的には次のような感染対策活動を行っています。

- 1 感染症に関するサーベイランス
毎週ICTによる会議を開催し、院内で使用される各種抗菌薬の使用状況の確認、各種耐性菌やインフルエンザなどの発生状況の把握、感染症に関する法令等についての情報を共有・協議しています。
- 2 院内ラウンド
毎週病棟を巡回し、現場の環境整備の状況確認や手指衛生・清潔操作の手順などのチェックを行います。
- 3 感染制御の助言、指導・実施
先の冬季オリンピック施設で問題となったノロウイルス、野球の巨人軍のキャンプが中止に追い込まれたインフルエンザなどが院内で発生した場合にも感染制御の助言、指導をします。また、職員が安全に働けるように予防接種の施行や針刺し事故があった場合の対応もしています。
- 4 感染対策マニュアルの整備
法律やCDCガイドライン等に基づいた院内感染マニュアルを作成、改訂しています。
- 5 感染に関する教育
年2回外部講師による全職員向けの感染に関する研修会を開催しています。新規入職者に対しては、その都度研修会を開いています。
- 6 地域医療機関との連携
2014年からは、長浜赤十字病院、湖北病院との合同カンファレンスを年6回開催しています。2016年からは、そのうち年2回保健所の方にも参加していただいております。

新型インフルエンザなど新規の感染症が発生したり、メディアに取り上げられる様な集団感染が起こらない限り、我々の仕事はクローズアップされることはありません。これからも、クローズアップされないように活動していきたいと考えています。



ICT会議

◆ICT取り組み紹介

感染管理者の役割

感染管理者 藤木 智美

2008年に感染管理認定看護師を取得後、2013年より医療安全管理室に所属となり感染管理者として活動しています。感染管理者は感染管理に係る適切な研修を修了した看護師であり、感染管理認定看護師となります。感染管理認定看護師とは、日本看護協会が特定の看護分野において熟練した看護技術と知識を用いて水準の高い看護実践のできる認定看護師を社会に送り出すことにより、医療現場における質の向上をはかることを目的としています。

院内の感染対策は、ICT（感染制御チーム）が中心となり、患者さん、全職員、訪問者を医療関連感染から守り、安全で質の高い医療の提供を目的とした活動をしています。

感染管理者はICTメンバーの一員であり、ICT活動以外として感染対策委員会活動、部署間の調整・対策などの提案、院外からの情報提供、感染発生時の対応業務、安全器材の導入、組織横断的な協働、他医療機関との連携などに関する活動をしています。

毎年新しい職員や院内職員の他に委託業者など様々な職種の職員が入り交じる中、感染対策の徹底には終わりはありません。患者さんの診療に関わるすべてのスタッフには標準予防策や感染経路予防策の遵守徹底を図っていきたくと思っています。

感染対策に関してご質問等がございましたら、お気軽に医療安全管理室、感染管理者までにご相談ください。

病院と地域の橋渡し

感染管理認定看護師 中村 寛子

現在、呼吸器科病棟師長として勤務しながら、感染管理認定看護師としての活動を行っています。病棟業務が中心となり、ICTメンバーとしての活動時間は減少しましたが、より現場に近い立場となったことで、実践現場とICTとをつなぐ役割も増えてきました。知識だけではなく、医療・看護現場で感染対策が実践できるように支援していきたいと思っています。

地域包括ケアシステムが推進される中、施設・在宅での医療処置が増加し、感染対策が必要な場面も増えていきます。急性期病院で行う感染対策と、施設・在宅で行う感染対策は“できること”が異なります。できることを実践するために、標準予防策などの感染対策の基本を押さえながら、施設や在宅でできる感染対策をどのように行っていくのかを、一緒に考えていく必要があると思っています。院内では、看護師向けに研修会を開催しています。平成30年度は、地域の看護師の方々にも参加していただける予定をしていますので、是非、ご参加ください。



薬剤師の役割

感染制御認定薬剤師 野淵 孝二
薬剤師 高山 直樹、湯月 英里加

感染制御チーム（ICT）における薬剤師の役割は、院内における抗菌薬適正使用活動において監視とフィードバックを主体的に推進・実践しています。主なものとして、抗菌薬使用量のサーベイランスや、薬物血中濃度解析（TDM）に携わっています。抗菌薬は有効血中濃度が得られない用量で投与し続けると効果がないばかりか、耐性菌の出現につながり、逆に有効域より高い状態が続くと副作用が発現しやすくなります。最適な抗菌薬治療を提供するために、薬剤師が血中濃度測定結果や臨床所見から解析を行い、より適切な血中濃度となるように用法・用量を設定して医師に提案しています。

近年、抗菌薬使用量の増大により、抗菌薬が効かなくなる微生物が発生するという「薬剤耐性（AMR）」が危惧されています。背景にはウイルスが原因の「かぜ症候群」に抗菌薬が効くと誤解されていることや、症状が治まったと判断し、医師に処方された抗菌薬を最後まで飲みきらないこと、家に残っている抗菌薬を自らの判断で服用することなど、国民全体の抗菌薬に対する正しい知識と理解が必要とされます。この問題に対して有効な対策が講じられなければ、2050年には全世界で年間1,000万人が薬剤耐性菌により死亡し、癌の死亡者数を抜くことが推定されています。ICTの一員として、薬剤耐性菌を出さないためにできることを、積極的に周知していく必要があると考えています。

臨床検査技師の役割

臨床検査技師 坪井 房幸
渋谷 紀美子

微生物検査室では、日常業務として個々の患者の臨床材料から起炎菌の検出を試み、その同定結果を薬剤感受性成績とともに、臨床側へ報告しています。

日常業務の中で、特定の病棟からMRSAなどの薬剤耐性菌が多発的に検出される場合や感染性腸炎の原因菌などの検出に際して、最初に察知することができるのは、微生物検査技師になります。

私たちは、通常の検査結果の報告以外に、検出菌についてさらに詳しい疫学マーカーの検査を行ったり、薬剤耐性パターンの解析や病棟の他の患者からの細菌の検出状況を解析し、病棟あるいは病院全体の疫学情報として主治医や病棟の担当看護師に対してはもちろんのこと、ICTやその他病院内の各部門に感染情報として提供しています。さらには感染源や感染経路の調査や病院環境の汚染の調査などを行っています。

微生物検査は、常在菌や環境中の細菌による汚染との闘いです。より良い検査結果を得るためには、適切な検体採取が求められます。検体を採取する職員に対する教育もまた重要な役目です。

微生物検査技師は、チーム医療の一員として、多職種間との連携により治療や院内感染対策が迅速かつ適切に実施されるようにさらに努力していきたいと思っています。



◆世界腎臓デー市民公開講座を開催しました

世界腎臓デーは、腎臓病の早期発見と治療の重要性を啓発する国際的な取り組みとして、毎年3月の第2木曜日に実施することが定められています。

当院でもその趣旨に賛同し、開催時期に合わせて3月11日（日）に滋賀医科大学医学部附属病院との共催で、市民公開講座を開催しました。

今年は「慢性腎臓病 あなたは大丈夫？～高血圧は透析の危険があります～」をテーマに3人の講師の先生から「高血圧がいかに危険であるか」「適切な血圧治療をすることで腎臓を守る」「だしを効かせておいしく減塩する方法」をキーワードにわかりやすく講演をしていただき、参加者の方もメモを取るなど熱心に聞いておられました。

当日は他にも長浜市健康推進課の協力で血圧測定コーナーを設けて、普段血圧を測る機会のない方にもご自身の血圧を知るいい機会になったようです。また減塩食の見本や参考になるように、減塩みそ汁の試飲コーナーも設けました。実際に試飲された方からは「うすいな」「ちょうどいいな」など様々な感想が聞かれました。普段の食事を見直すきっかけになればと思います。

今年で3回目の開催となりましたが、当日は市民の皆さんや行政、医療関係者など168名の参加者がありました。毎年多くの方に参加していただき、市民の皆さんの関心の高さを感じました。



講演会後に寄せられた感想を一部紹介します。（アンケートより）

- ◇ 高血圧と腎臓のかかわりがよくわかった。
- ◇ CKDについて病態であったり、どのタイミングで専門医に受診した方が良いのかわかりやすい講演でした。
- ◇ 日常生活で気をつけられる減塩の話についても聞いて良かったです。
- ◇ だしの活用、油の利用をもっとやっていこうと思います。こんぶやかつお以外のトマトやきのこのだしを是非やってみようと思います。大変貴重なお話をありがとうございました。
- ◇ どの講師の先生もとてもわかりやすかったです。